

03 精液がっかけ変態化洗脳コース

「あいらっしやいませ。ええ、プリムちゃんですね。もうすっかり常連さんですね」

「ちよつと変わったプレイヤーですか、では「ちららの」コースはごほうじゅつ」

「元の魔法少女の人格のまま精液が大好きになる催眠のセットです。オプショナルとして「ちらら」も使えますし、楽しめる「く」間違いなしです」

「『指令の……ひびきあめつ』」

「『ええ……戦闘員がいっぱいいる、いい、いい……うっ、うっ、10人もいい』

『全部、クローン戦闘員ついでっ』

「『いつも、わらわら湧いてくると思ったら、もううなってるんだ……え？ 何、ワソよね』

「『えええ——ッ！ わたしが、今回、全員の手相をするの……』

「『聖天使の力さえ戻れば、10人でも100人でも楽勝なのに……エッチなことじゃないわよね！』普通」

「『うっ、また洗脳とか催眠で無理やりエッチで変態なこと、10人と、10人もなんて……あ、え……今日はおちんちん、入れなくてもいいの……』

「『けど、全員から精液をひたすらぶっかけ……それちゃうんだ……10人分。そんな……』
<……』

「『嬉しいわけ無いでしょ！』変態……「の」なんてそんな変態なこと……ひっ、おちんちん近づけてっ、え、わたしから近づいて、なんて……いや、でも、おちんちん抜かないと……』

「『うっ、うっ、うっ、うっ……これは、洗脳で仕方なくなんだから……んっ、おちんちん10本分の匂い……』
「……嫌いなはずなのに……うっ、うっ……』

「『うっ、近いよね。はあはあ、鼻先に勃起したおちんちんがあっ、当たっちゃいます。何、おちんちん浅ましく扱っちゃって、それを順番に、わたしに射精してっ、楽しむってことなのね』

「『いいわよね、ほら、勝手に出してちゃっても。変態の雑魚戦闘員の思いつきなのよね』
「見せつけオナニーとザーメンぶっかけなんてほんと変態」

「『え、パ、パ、パ、パ……見せて!?』ばっかなんでそんなこと、うっ、うっ、もう恥ずかしい……ええ、ええ、ええ、ええ……』
「……」

「……」

「カウパーがだらだら溢れてきて、ふぁん……だめ、わたしこんな臭いにおい好きなんかじゃないんだから」

「ひゃ、出すの、出しちゃうの!?!」コンドームパンパンになるくらい大量のせーし……ふぁん♡お、オナニーなんかしないわよ!?! おちんちん見てオナニーなんて変態、もう、わたし変態じゃないんだから……はぁ、はぁっ♡」

「あ、あ、おちんちんぐくぐぐっっせーしの匂いも……わたしの目の前で、ふぁ、ダメなのにっ——んぶっっ、んぶ、あぶぶぶ、ひゃぶぶぶっ……んぶっ!?! ひゃぁっ♡」

「あぶっ、顔にも、髪にもたっぶりザーメン、かかっっっ、びちゅびちゅ、目開けられない」

「んあ、んあぁッ、アロアロの濃いせーしまだ出っっ……はぁはぁ、」の熱と匂い、すっっ……♡……♡」

「ちっ、違っっっそんなわけ……ないっっ、言っっっっっっっっっっ」

「ぶっかけられて、興奮するだなんて、絶対ないからっっ」

「な、何よ。今度は三人でなの。じゅ、十人全員でもいいわよ、それくらいじゃなんでもないんだ、から……んひいー！ 勃起チンポ、んぶっ、顔にも、髪にも、んあっ、おっぱいにも擦り付けて、変態——」

「き、気持ち悪だけよ、こんなガチガチで我慢汁だらだらにたらしてるちんぽなんて……んあっ♡ 精液染み込ませるおっっ、ぬるぬるっ……鼻にまで!?! んんっ、もっっ、せーしの匂いしかし無い……んぶっ、お、美味しくなっっっっ」

「ぶあっ、ん……はぁ、はぁっっ」

「何これ、勃起したものを擦りっけられてるだけなのに、んぶっ♡♡あ、あそこに入れられてるわけでもないのにっっ……ん、んぶ、あぶっっ♡」

「んんんくオナちんちんも、汗の匂いも、深呼吸のたびに、はぶっっ、く、クセになっっっきてえ……んぶっっ、裏筋の、せーしのすえた匂いなんてかぎたくないのに、ちゅばれろ。ん、んん!?! わたしなっっっ……」

「んんのおかしいよぉ……っっ……っっはぁっっ♡♡う、うっ……そんな、はぁはぁ……精液が大好きになるなんて……ほんとに変態っ……でも、ん、ん、これくらいで聖恋天使プリム・ポーシヨンの心を折るなんて、まじなっっ」

「んっ!?! おちんちん擦りっけちゃだめ!?!」

「わたし、こんな変態じゃないのに、自分からオチンポに類すりして、ぬるぬるのっっにっっでガチガチなおちんぽの……求めちゃっっっっ、はひひっ……♡」

「服の中に入れちゃダメ!?! わ、脇にも、ソックスの中に突っ込むなんて変態、変態、へ、変態なんだからっ……んんあ、あぁぁ……んぶ、めっっ……」

